「創造的復興」が問うこと

写真は 2011 年 5 月 15 日(日)午前に神戸市新長田の商店街である。東日本大震災から 2 カ月余り、「がんばろう！東日本！！」という垂れ幕もかかる。阪神・淡路大震災の１カ月後から、「定点観測」のように何度も訪れた。再開発された商店街は、日曜日というのに閑散としていた。「復興災害」と報じられたこともある。

表題は朝日新聞の先週 3 月 12 日社説見出しだ。新長田にもふれているので一部紹介したい。

津波被災地を、歩く。大船渡、陸前高田、気仙沼、南三陸、女川-----。無機質で巨大な土木工事が目に飛び込む。真新しいコンクリートの壁が海沿いにそびえる。防潮堤だ。旧市街地では最大で 10 メートルに達するかさ上げが進む。ピラミッドのように連なる土の山。行き交う大型トラック。砂ぼこり。岩手、宮城、福島の 3 県で、防潮堤の総延長は 400 キロ。かさ上げなどのための土地区画整理事業は 50 カ所で 1400 ヘクタール、東京ドーム 300 個分だ。5 年前、津波にすべてをさらわれた風景とは別の意味での「異世界」が広がる。

被災直後、政府は「創造的復興」をうたった。人口減や高齢化、産業の空洞化など、日本の各地がかかえる課題の解決をめざす先進地として被災地を位置づけた。----工事を見た構想会議の一人は「こんな光景は想定していなかった」。復興庁幹部も「やりすぎた」と本音を漏らす。------どこで歯車が狂ったのか。誰が責任を負うべきか。解をみつけるのは簡単ではない。被災地といっても、地域ごとに事情は異なる。ただ、安心して暮らし、働く土俵を整えても、人が戻らなければ復興はおぼつかない。それが、21 年前の阪神大震災の教訓でもある。

神戸市の新長田地区。100 軒近くあった戦前からの下町商店街は 9 割が燃え、市の再開発でビル街に生まれ変わった。当時も「創造的復興」がスローガンだった。しかし高い維持管理費などを嫌い、多くの商店主が離れた。後継ぎがおらず、シャッターを下ろしたままの店が続く。「東北は、僕らとおなじ道を歩いたらあかん」。お茶屋を営む伊東正和さん（67）は言う。自らの経験を伝えようと、宮城県南三陸町の仮設市場「さんさん商店街」に何度も足を運ぶ。再開発計画を神戸市が決めたのは、震災のわずか 2 カ月後だった。「おかみに従った方がええやろうと考えた。でも自分の街は自分で守らんと。随分たってから、それがわかった」

（2016 年 3 月 15 日）